統合失調症闘病記の書名のテキストマイニング

小平朋江

保健医療福祉の総合大学 聖隷クリストファー大学

いとうたけひこ

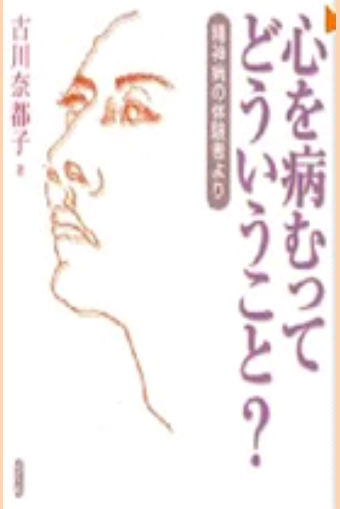
和光大学

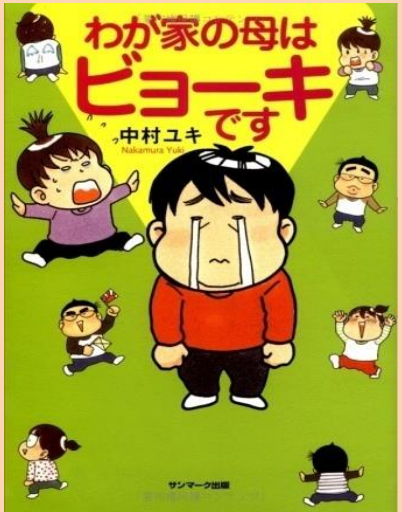
日本心理学会第77回大会
札幌市産業振興センター
技術訓練等体育実習室
2013年9月19日（木）13:10-15:10 1PM-108

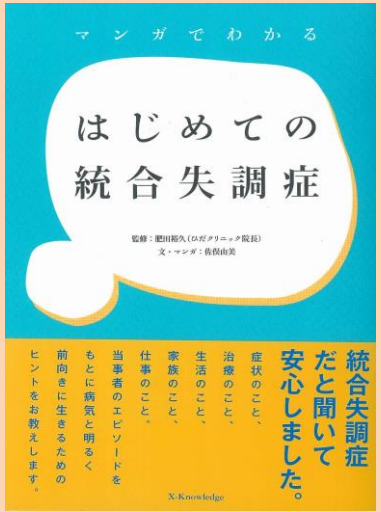
問題

- 統合失調症闘病記は研究資料やナラティブ教材としての意義がある。

- 教育的活用のために、小平・いとう（2012）は、統合失調症闘病記の単行本を217冊収集し、リスト化。







ナラティブ教材とは

患者の病いの体験を患者や家族などが自ら自分のことばで語った物語りが表現された作品であり、学習者にとってその体験の理解を促進したり、助けになる目的で看護教育などに利用されうる形に教材化されたもの

（小平・伊藤, 2009）

ナラティブ教材の意義

＜看護学生の感想＞

・リアル感があり何が苦しいか患者の目線で見た病気の症状がわかる。生の声は大切。

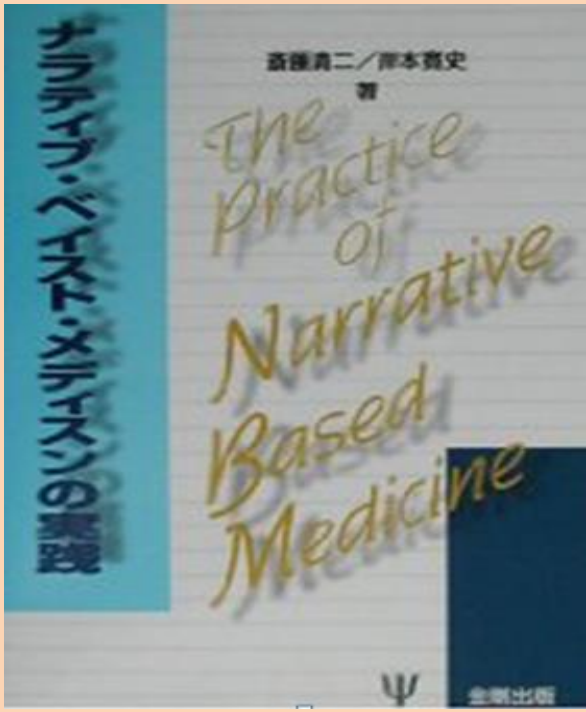
・実際の患者と自分の思っていた患者像が違っていて、自分の中の誤った情報に気づいた。知っているつもりになっていた自分に気づいた。症状を具体的にイメージする助けになる。

・精神看護に興味が湧いた。講義で学んだことを実習に出た時に生かしたい。症状とどう折り合いをつけながら生きるか一緒に考えるのが看護の役割。

●学生の想像と現実のギャップを柔らかく埋める役割としてのナラティブ教材

●教員を媒介とする疑似体験と関わり方への気づき

ナラティブ教材の意義



●「ナラティブ教材」の用語

・医学教育：斎藤（2001）

・企業教育：堀田他（2010）

●ナラティブ教材から学ぶ効果

・病いの理解、当事者の生き方

・偏見低減効果と深い人間理解

・看護独自の介入方法の在り方

●伊藤(1998)の指摘＝差別（行動）ではなく偏見（態度）を変えるために教育技法の確立が必要

差別と違い、偏見は、

「本人の人間的自覚によって変えられるべき性質のもの」であり、

「その達成には権力的ではなく、教育的・発達的な働きかけ」が必要

自分の偏見に気づき、共感的に相手の人に向き合える学びの体験が偏見克服と成長・発達のプロセス

闘病記について

- 門林（2011）

「病気と闘う（向き合う）プロセスが書かれた手記」

（2000年の定義）

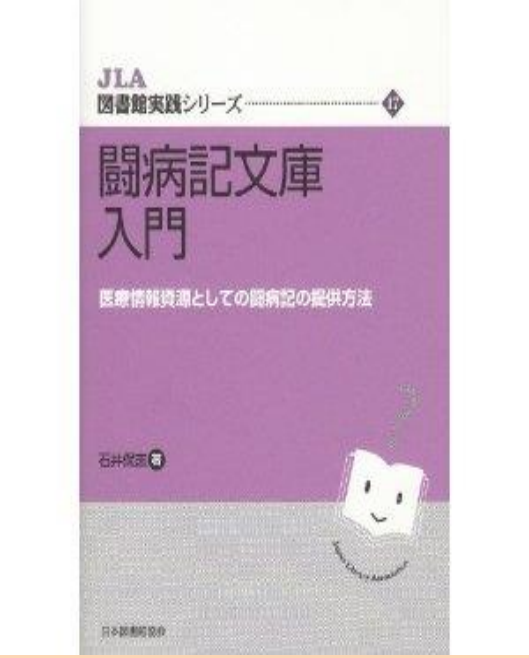
「闘う」⇒「共生・共存」へ変化、

病をもって生きる生活体験全体

- 石井（2011）

「健康・医療情報における“生き方情報”」

治療法だけでなく、病気と生活に関する不安や疑問について知りたい情報ニーズに応えてくれる　絵本や医療マンガなど、医療資源に思えない資料も医療情報資源



闘病記について

●八木（2009）

「精神医学がこのことに無関心であってはなるまい」

「手記を読んで、すでに慣れ親しんでいるはずの

この病について驚きを新たにすることが多かった」

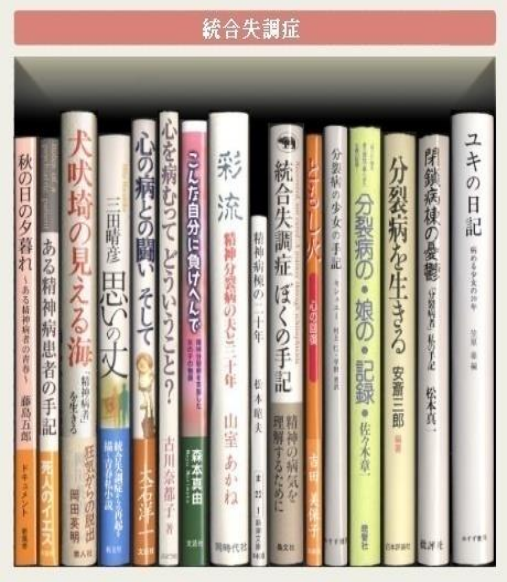
●Kleinman（1988）

「病いは経験である」

病いの体験が生々しく当事者や家族などの言葉で

綴られ教材として豊かな学び・気づきを提供

「闘病記ライブラリー」のサイト http://toubyoki.info/ より⇒

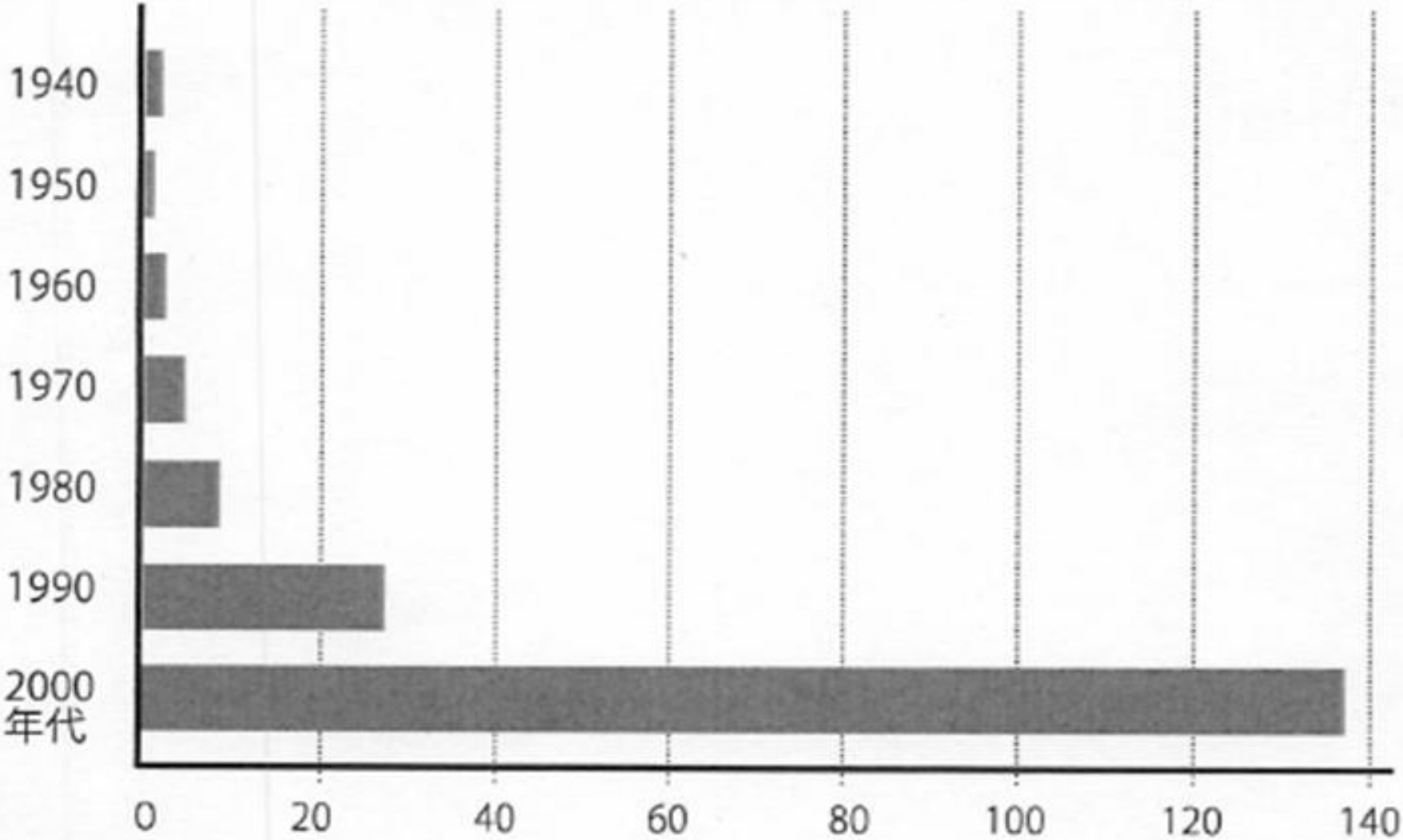


闘病記の意義

●入院中心の医療
　⇒地域の中で当事者が生活するための支援

●過酷な状況からの回復や克服
精神分裂病の呼称変更に見られる社会変革を起こす可能性

小平・いとう(2012)
第3章 『当事者が主人公』の実践の在り方を考える：統合失調症当事者によるナラティブを手がかりに いとうたけひこ（編）「コミュニティ援助への展望」角川学芸出版. pp. 70-94



（＊ 2010 年以降の 32 冊は除外してある）

図1　1940 年代から 2000 年代までの統合失調症の闘病記（単行本）発行点数の推移

ナラティブと知識創造

『当事者研究の研究』(2013)より
石原孝二編　医学書院

●石原
　「障害に関する知をつくりだしつつある」
　「専門知のあり方の再考をも迫るもの」
●向谷地
　「問題や過去の経験というのも宝の山」
●熊谷
　「言葉にして初めて、体験は、確かに存在したものとして承認」

目的

- 統合失調症闘病記リスト217冊の
  書名・副題を対象に、
  テキストマイニングで、
    表現の特徴、
    特に用いられた単語を分析し、
- 時代的変遷を可視化して確認すること

方法

＜分析対象＞

- 小平・いとう（2012）が収集、リスト化した統合失調症闘病記217冊に関する文献情報

＜分析方法＞

- Text Mining Studio 4.1（数理システム）で分析

結果

1. 全体の書名・副題の形式的特徴（基本情報）

- 総冊数(217)における平均使用文字数は11.6字
- 述べ単語数は910単語で、内容語の異なり度数（単語の種類数）は530単語

結果

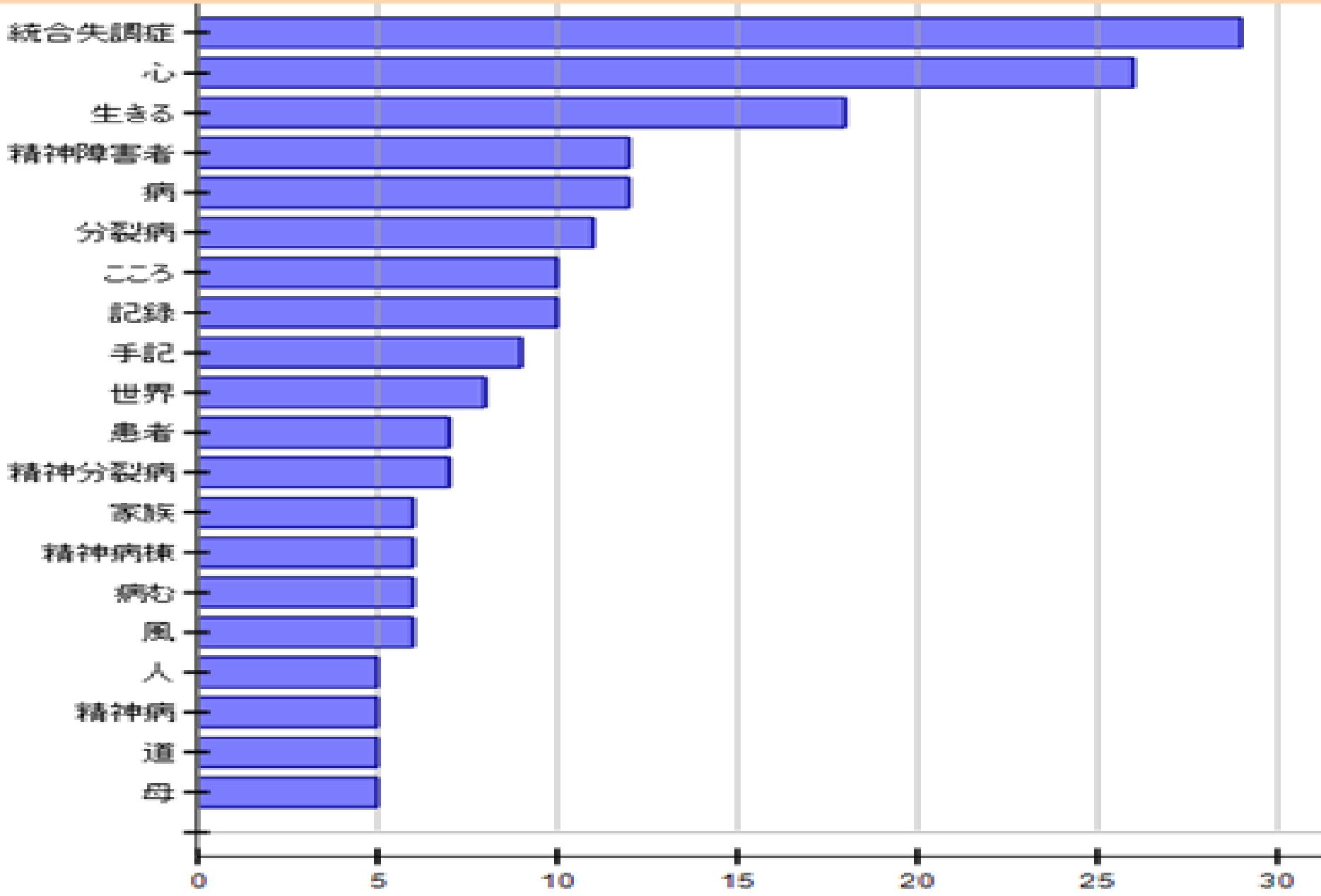
2. 使用頻度の多い単語(単語頻度分析)

- 「統合失調症」: 29回
- 「心」「こころ」: 36回
- 「生きる」: 18回
- 「精神障害者」「病」: 12回

↓

「こころの病い」としての統合失調症

統合失調症闘病記217冊の表題における単語頻度分析（上位20件）



結果
3. 3つの時代区分ごとでの使用頻度の多い単語

- 2002年病名変更を境に、
  それ以前は「分裂病」（10回）「精神分裂病」（3回）
- 2003年以降は、
  「統合失調症」（28回）

⇒合計47回（全体の21.7%）

- 2002年以前
  「分裂病」「体験」「少女」「自分」「記録」「精神病棟」
- 2003年-2007年
  「患者」「精神障害」「生きる」
- 2008年以降
  「母」「軌跡」「なれる」「統合失調症」「風」「人生」

結果

4. 書名・副題の病気に関する単語から見た特徴

- 「精神分裂病」「分裂病」「分裂病者」「統合失調症」が明示

⇒合計49冊（全体22.6%）

- 病名変更の2002年以前の書名の2割に使用
- 「統合失調症」を含む書名は29件、2003年以降の書名に使用

⇒急増は病名変更でカミングアウトしやすくなった？

- 2003年以前でも以降でも約8割の書名には病名の明示がない
- 「病」「病い」12件のうち11件が「心」「こころ」と結びつく

結果

5. 病気・精神病者「を生きる」当事者から，病気・障害「と（ともに）生きる」当事者への時代的変化

- 病気や精神病者が「生きる」にかかる⇒11件

①病気「を生きる」型（4件）

②病気「と（ともに）生きる」型（7件）

・2002年までは2件とも「を生きる」

・2003年-2007年の6件は、

①「を生きる」（2件）

②「と生きる」「と共に生きる」（4件）

・2008年以降の3件は、すべて病気・障害「と（ともに）生きる」

・「を生きる」型4件は2005年まで

・「と（ともに）生きる」型7件は2003年に2件初出し2006年以降この型に限定

考察

- 病名明示が少ない理由・・・
  ①スティグマ・偏見の影響
  ②著者の病識や納得の度合い
  ③闘病記の本質としての自分を語ることの意義
- 当事者視点での病いの語りを通した回復の姿が知られる
  ⇒人々にとって偏見を減らすきっかけに
- 「とともに生きる」への時代的変化
  ⇒病いと闘う姿勢から客体化しつつ共生する姿勢へ
  テキストマイニングは「人の意識を超えた処理が可能」（服部，2010）であり、本研究の結果はその変化の量的なエビデンスになると言えるのではないだろうか

NHK Eテレ（2013年5月29日放送）

「ハートネットTV」の「福マガ５月号」でナラティブ教材が紹介される

「語りの教材」という意味で「ナラティブ教材」と言っている

共同研究者のいとう（和光大学）がインタビューで語り字幕でも放映

特集では、「当事者が描く漫画」について紹介。統合失調症の主人公が登場するもの、アスペルガーの子ども時代が描かれた作品など、・・・・・リアルなマンガ表現の魅力と、活用される現場を取材します。

（NHK　Eテレ「ハートネットTV」「福マガ５月号」より） http://www.nhk.or.jp/heart-net/tv/calendar/2013-05/29.html）

ナラティブ教材活用の講義後、学生がNHKのインタビューに答えての感想

●Aさん:「わからないことも『あーこうなんだ』っていうふうにわかったみたいな・・・」

●Bさん:「漫画から学ぶ著者の体験がわかって絵があることによってわかりやすい・・・」

以下の写真は、和光大学 Wako University Blog 2013年5月21日より
http://www.wako.ac.jp/blog/2013/05/5295.html

ナラティブ教材の最も新しいスタイル

「幻聴妄想かるた」

ハーモニー(2011)

医学書院

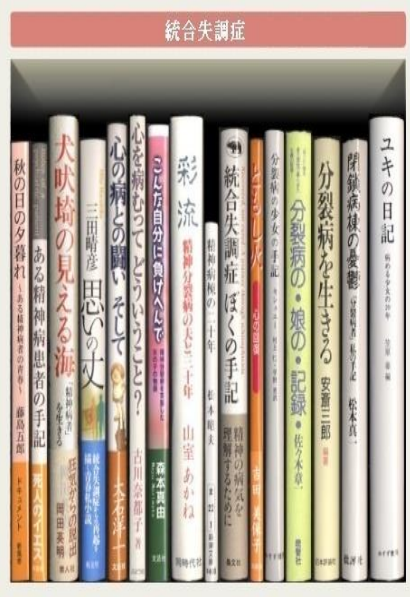
本大会では小講演（L-029）も行います

統合失調症の闘病記
ーナラティブ教材としての意義ー

9月21日（土）14:10-15:10

札幌市産業振興センター

産業振興棟セミナールームB



小講演もどうぞよろしくお願いいたします

ありがとうございました

本研究は平成23年度～平成25年度科研費基盤研究C（課題番号:23593195）の助成を受けた。

【文献】

小平朋江・いとうたけひこ（2012）. 統合失調症の闘病記のリスト：ナラティブ教材の可能性を展望する 心理科学,33(2),64-77.

小平朋江・いとうたけひこ (2013) 統合失調症当事者の語りのテキストマイニング：闘病記のタイトル分析を中心に　看護研究，46(5)（印刷中）